【資料】
公開国際シンポジウム報告

東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係

―中・朝・日の思想家たちの証言―

加来雄之

本報告は、二〇二〇年度大谷大学真宗総合研究所一般研究「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係の解明と国際的連携体制の構築」の研究活動の一環として、二〇二一（令和三）年二月二〇日（土）、中国、台湾、韓国、日本の研究者によるオンライン会議として開催された公開シンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係―中・朝・日の思想家たちの証言―」についての報告である。

本研究班は、研究代表者・加来雄之および福島栄寿先生、織田顕祐先生、浦井聡先生との共同研究であり、東アジア諸国（中国、台湾、韓国）の近代化における思想形成において日本の仏教と哲学がもった影響、特に各国の近代化に共通する仏教と西洋哲学の相互影響を取り上げ、東アジア諸国の仏教に与えた影響を解明し、あわせて各国の仏教学・哲学・歴史学研究者との国際的連繋の下で研究を進めることで、近代仏教における哲学の役割、東アジアの哲学における仏教の役割、そして両者にとっての〈近代〉とは何かを問い直すための学際的国際的な視座の構築とサークルの創出とを研究目的とした。この目的を遂行するために、中国、台湾、韓国、日本の研究者に呼びかけ、「東アジア各地域の近代化において仏教と西洋哲学は、どのような影響を持ち、またどのような役割を果たしたか」について、各地域の共通性と差異を明ら

かにすることに特化したシンポジウム形式の公開研究会などを数回開催し、年度末に研究員によってこれらの研究成果をまとめた論文集もしくは報告書を作成する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックの影響により実現が叶わなかった。

本来、本公開シンポジウムも、第一回目のシンポジウムとして二〇二〇年六月に大谷大学を会場として開催されるはずであった。しかし感染拡大による緊急事態宣言の発出などのため度重なる開催の延期・形態の変更を余儀なくされ、最終的に、年度末近くになってZoomによるWeb会議という形式でやっと実施することができた。このため上記にあげた年度末に予定していた研究成果をあげることはできなかった。しかし、少なくとも七名の研究者からの発表を通して、それぞれの言語圏における思想家たちの近代化における課題と影響関係を共有し、今後の研究課題を確かめることによって、当初の国際的学際的なサークルの形成という目的は達成できたように思う。

本シンポジウムの趣旨と経緯については、研究代表者・加来による当日の「挨拶」を転載する。

本シンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係―中・朝・日の思想家たちの証言―」が開催される、ここ大谷大学は、日本の京都にある小さな仏教系の私立大学です。創立は、一六六五年であり、一九〇一年に近代的大学として出発しました。そのときの学監（現在の学長）が清沢満之（きよざわまんし一八六三～一九〇三）です。清沢は、明治期の日本における仏教思想家として西洋哲学を探究しながら仏教思想の再生を図りました。清沢は、西洋（ギリシア）に始原する「哲学」という普遍性を指向する思想によって仏教を語り直そうとしたのです。この清沢の活動は、外に向けては日本近代が直面した西洋思想の強力な圧力への抵抗であり、また西洋からの東洋の伝統的思想に対するオリエンタリズム的論述への異議申し立てであり、内に向けては、近代という新しい時代の風潮のなかで揺らいでいた他力仏教の社会的位置の回復にあった、と一応は言えるかもしれません。しかし再応いえば、清

沢には明らかに、西洋も東洋も包むような人間存在の深みに下りていく思想として仏教（本願他力門）を基礎づけ、現実社会を荷負する主体を確立するような言説として展開させる、という課題をもっていました。

さて今回のシンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係―中・朝・日の思想家たちの証言―」は、中国語・朝鮮語・日本語というそれぞれの言説空間において、自覚的にオピニオンリーダーであろうとし、また大きな影響を与えた人々の中から八人の思想家たちの証言が取り上げられます。それぞれの地域は、仏教が置かれていた社会的地位も、西洋からの哲学の流入や受容の程度もまったく異なっていました。しかし彼らは同じくそれぞれの地域において西洋哲学と仏教の影響関係、ときには緊張関係の直中を生きたのです。この度、選ばれた八人の思想家を生年で配列すれば次のようになります。

松本白華（日本、1838-1926）
井上円了（日本、1858-1919）
鈴木大拙（日本、1870-1966）
韓龍雲（韓国、1879-1944）
田辺元（日本、1885-1962）
牟宗三（中国・台湾、1909-1995）
武内義範（日本、1913-2002）
阿部正雄（日本、1915-2006）

東アジアの近代は、望まない西洋との遭遇・衝突で始まりました。圧倒的な西洋近代科学の力と、それぞれの政治

形態の中で、社会を担う真の主体を確立する思想を形成することが東アジアの思想家にとって急務の課題となっていました。東アジアの中で、近代化という未曽有の出来事の中で思想を確立しなければならないという課題をはじめに引き受けたのは日本でした。この日本の一早い近代化がさまざまな形で東アジアに波及していきました。

今回、発表者たちによって取り上げられる八人の思想家たちは、あるものは僧侶として、あるものは教育者として、あるものは哲学者として近代を生き抜きました。彼らに共通するのは、西洋近代という暴力的とすら言っていいほどの巨大な圧力を持つ思潮に抗するために、西洋哲学を学ぶことによってのみならず、同時に東洋の思想を手がかりにして、新たな主体を確立する言説空間を創出しようとしたところにありました。とくに、これらの思想家たちの思想形成において、仏教が大きな影響をもちました。それは彼らが、仏教を東アジアの伝統において、西洋の哲学に比類しうる普遍性を指向し、かつ体系を有する思想の一つであると見なしていたからでしょう。

しかし、私たちは、このような異なった歴史的思想的文脈の中で歩んだ東アジアの思想家たちが生きた状況や思想課題やそれぞれの影響関係などについて多くを知らないのが実情です。本日の発表者たちは、上述した思想家たちが生きた近代東アジアの言説空間に私たちを連れていってくれます、のみならず、その言説空間を鳥瞰する視座を提供してくれます。私たちは、この思想家たちの言説が当時の社会にもった影響とともに、その影響力の本質とは何であったのか、またその言説のなかに潜んでいる時代的限界や問題点をえぐり出す論述や討議に遭遇することになるでしょう。私たちはこれらの思想家たちを再評価することも求められるでしょう。さらには、私たちが今後、取り上げていかなくてはならない思想家たち、例えば日本の清沢満之などを東アジアという文脈の中で再発見していく機縁にもなるでしょう。

このささやかなシンポジウムは、二〇一八年一二月八日・九日の二日間にわたり、中国広州の中山大学で開催されたシンポジウム「東アジアにおける仏教と近代化の問題」を機縁とします。そのシンポジウムにおいて、大谷大学か

ら、私・加来が清沢満之について、織田顕祐先生が佐々木月樵について報告しました。シンポジウム終了の後、何人かの発表者との懇談の中で、中国、台湾、韓国、日本のそれぞれの大学において、東アジアの近代化における西洋哲学の受容と伝統的な仏教思想との影響関係を研究するネットワークを形成しようと話し合ったことが出発となっています。今回のシンポジウムは、日本での開催ということがあり、取り上げられた思想家も日本人が多くなっています。しかし今後、他の国で開催されるときは、開催国の独自性が発揮されるものと推測します。

本来、このシンポジウムは、本研究班の第一回目のシンポジウムとして二〇二〇年六月に大谷大学を場として開催されることが予定されていました。しかし新型コロナウイルスによるパンデミックの影響のために何度か開催時期を延期せざるをえませんでした。しかしなかなか収束の時期が見通せないことから二〇二一年二月二〇日の一日で Web 会議として開催することになりました。

これから中国語、朝鮮語、日本語において独自の思想を形成した思想家たちについて七つのきわめて魅力的な発表があります。その発表も楽しみですが、幸い、その発表内容に相応しい研究者に司会を引き受けいただくことができました。発表後の討議から、さらにどのような新たな課題が展開していくのか期待に胸が膨らみます。この贅沢な時間を皆さんとともに味わいたいと思います。

最後になりましたが、中国語から日本語への翻訳を一手に引き受けてくださった河合一樹先生（國學院大学）、通訳を担当してくださった廖欣彬先生・譚仁岸先生に感謝します。とくにご自身の発表もある中で、中国人研究者への対応、司会、通訳まで複数の役割を鬼神のごとく担当してくださる廖欽彬先生の志願とエネルギーと人脈がなければこのシンポジウムは実現できませんでした、深く感謝もうしあげます。また本学博士後期課程の常塚勇哲君の準備段階から献身的な協力、大谷大学教育研究支援課の方々の尽力によってこのシンポジウムを実現することができました。ありがとうございます。

以上、開会の挨拶とさせていただきます。

以上でシンポジウムの趣旨は尽きているのであるが、あわせて付言したいことは、今回のシンポジウムでは、七名の研究者による専門性の高い研究発表のみならず、それぞれの発表内容について造詣の深い研究者に司会進行およびコメントを依頼できたことによって、シンポジウムが大変充実したものとなったことである。

シンポジウムの研究発表者・司会は以下の通りである。

1. 林鎮国（LIN chen-kou、台湾・政治大学）
逆向きの教相判釈―牟宗三哲学再考―
司会　朝倉友海（あさくらともみ、日本・東京大学）

2. 李海涛（LI Hai-tao、中国・山東大学）
韓龍雲の『仏教維新論』とその近代意識
司会　金浩星（キム・ホソン、韓国・東国大学）

3. 川邉雄大（かわべゆうだい、日本・日本文化大学）
幕末明治期における真宗僧とキリスト教・東洋学・西洋哲学―松本白華を例として―
司会　福島栄寿（ふくしまえいじゅ、日本・大谷大学）

4. 長谷川琢哉（はせがわたつや、日本・東洋大学）
東アジアにおける井上円了の影響関係について
司会　名和達宣（なわたつのり、日本・真宗大谷派教学研究所）

5．龔隽（GONG Juan、中国・中山大学）
鈴木大拙と近代東アジアにおける大乗論述の確立―英訳版『大乗起信論』（1900 年）・『大乗仏教綱要』（英文 1907 年）を例として―
司会　マイケル・コンウェイ（日本・大谷大学）

6．浦井聡（日本・大谷大学）
浄土が〈ある〉ことをめぐって―田辺元と武内義範を手がかりに―
司会　竹花洋佑（たけはなようすけ、日本・大谷大学）

7．廖欽彬（LIAO Chin-ping、中国・中山大学）
仏教とニヒリズム―阿部正雄を中心に―
司会　浦井聡（うらいさとし、日本・大谷大学）

この八人の思想家たちは、それぞれの言語圏の中で西洋哲学と仏教学との影響関係を生きた人々である。私たちは東アジアの各文化圏と深い関係をもって生きていながら、それぞれの言語圏においてどのように近代が遂行されたのか、近代における思想家間の交流、思想家たちのもった課題、それぞれの思想が果たした役割や影響、政治的限界や挫折などについての知見を共有できているとは言い難いのが実情である。私たちは、このシンポジウムを通して、それぞれの言語圏における思想家たちの課題と生き方にはじめて出会い、また他の言語圏からの眼によって自国の思想家に出会いなおすことができるであろう。また研究計画では二日間に開催する予定であったものを一日にまとめたこともあり、それぞれの発表について２０分ほどの討議時間しか持てなかったことが残念であった。

さて、シンポジウムの終了後に設けた Web における懇親交流の場では、今後の研究の持ち方が話題となった。具体的

には、今回は、各言語圏の思想家たちの個人としての思想や活動についての研究が中心であったが、今後は、新たな思想家も取り上げつつ、それぞれの思想家の国を超えた相互交流や影響にも焦点を当てること、また統一のテーマ（たとえば「業」など）を立てて問題を深めていくことなどの提案がなされ、また次回のシンポジウムを、台湾を開催地として準備を進めることも確認されたことを付言しておきたい。

さて本シンポジウムの七名の発表の発表は、それぞれ論文として提出されている。外国人発表者である四先生の論文については『大谷大学年報』に掲載、浦井聡先生の論文は『親鸞教学』に掲載される予定である。また川邉雄大、長谷川琢哉両先生の論文は、本研究所『紀要』に「公開シンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係―中・朝・日の思想家たちの証言―（Ⅰ）日本人研究者篇」として掲載する計画であったが、下記に述べる事情により、それぞれ他の媒体で公表されることになった。

ここで特に、今回のシンポジウムの成果として『紀要』に掲載予定であった川邉、長谷川先生による二論文について報告しておきたい。両先生の発表および論文は、今回、取り上げられた八名の思想家の中でもっとも初期の二人の日本人思想家についてのものである。松本白華、井上円了は、ともに日本・真宗大谷派の寺院出身であり、その意味では同じ文化的背景を有していたのであるが、シンポジウムの課題であった東アジアの近代化における西洋哲学と仏教との影響関係についてはまったく異なったものとなった。松本は、漢学の深い素養をもち、大谷派の僧侶としてはじめて欧州を視察し、哲学にも「ヒロソヒー」として触れ、また後に真宗大谷派の上海別院の輪番も勤め中国の思想家たちとの交流の機会を作ったが、西洋哲学を自らの思想として受容することはできなかった。一方、井上は東京大学で哲学を外国人教師から学び、仏教の教理を哲学的に体系づけ、仏教を近代的な哲学的宗教として再提示してみせ、日本のみならず東アジアにも拡大し、思想的に大きな影響力を与えた。川邉先生の言葉を借りれば、松本と井上の二人は、まさに「天保の老人・明治の青年」（徳富蘇峰）というべき、漢語を介して欧米の近代の情報を得ていた世代から、直接に欧米の言語を通して西洋の

近代思想に直接触れる世代へという世代交代の好例といえる。この二人の思想家の比較を通して東アジアの近代化に対する日本人知識人の意識と対応の変化をみることができる。この意味で、川邉、長谷川両先生の二つの論文を合わせ読むならば、私たちが本シンポジウムが目指していた、西洋哲学と仏教との影響関係における近代初期の東アジアにおける思想情景をあざやかに描きだすことができたであろう。

本研究所『紀要』の編集方針が本年度より大きく変更されたことを研究代表者の加来が十分に承知していなかったためこのような川邉、長谷川両先生の有意義な論文を掲載ができなくなった。両先生にあまりにも礼を欠く結果となったのは、ひとえに研究代表者である加来の責任であり、紙面を借りて両先生に心よりお詫びしたい。

＊本研究は二〇二〇年度一般研究・予備研究（加来班）の研究成果である。